

り、いそぎ修理された貨車はゆれながらの徐行、元氣な若者でも苦行、仮泊宿舍の食事、早朝出発の準備、仮眠の連日連夜の強行軍に半病人も多く、乳児を失った母親に埋葬の寸時もない難行、半分以上は馬車に荷物、子どもを積み、男たちが周囲を警備しながらの行進は半月、青島の仮泊所に着いたとき、元氣な男たちも、出港まで二日仮眠の連続。

引揚げのあいだ、国共両軍の勢力は、ことに強奪暴行地帯になり、危険地帯を予知して安全を頼んだ中共軍に、お礼心に麦粉半袋、煙草一本さえ、難行な日本人からいっさい受け取らない国民性は、今もはっきり覚えてる。

青島出港、米軍上陸用舟艇、船底浅く、船室にすし詰大揺れの三日間、ほとんどの難民は絶食状態の半病、佐世保上陸で一安堵。昭和二十一年四月、本籍大牟田市は戦災都市で居住不能、やむなく妻の実家、大分県東国東軍武蔵町小城坂本多重方に荷をとくが、農家ながら地主で主食少なく、山、田畑を近くの親類の協力で開墾に努める。

数年後、隣町安岐町に親類の協力で雜貨店を開き、行商を夫婦で協力するが、無一文に近い資本では、男の子三人の教育費と不十分な生計、昭和三十六年十月、安岐川の大水害で商品家具類水びたし、さいわい三男東京附近に就職し一家を持つ等、そのすすめで湘南地に住み、住居の関係で戸塚、辻堂の会社の独身寮管理人で数年間、その間県営建築訓練校に学び、建築設計士の免許状を受け、設計事務所開設、建設会社に就職等今日いたり、男子三人も夫婦安住の地を得、老齡の身を健康第一にただ波瀾の前半生を追憶する昨今である。

中国からの引揚げ

北海道 石山 八郎

昭和十八年十月、四年間の現役北支勤務を終えた私は現地満期除隊をした。農家の五男に生まれた者にとって、は落着くところがなかったからだ。華北省張店、輕金屬株式会社に入社した。

工場は張店より三キロぐらい離れた南定に建設中で近くにある盤土結岩よりアルミナを抽出する工場で南方のボーキサイトにかわるものだった。

四国の徳山ソーダーを解体して現地へ運び組み立てるべく建物、発電所及び日本人、中国人、従業員の宿舍福利厚生施設等広大な敷地に八分通り出来上がっていたのが昭和二十年八月頃だった。

その頃満州の鞍山製鉄所を爆撃すべく米空軍のB 29六十数機が三編隊くらいに分かれて上空を飛んで行ったこともあったが今考えると日本人は何を呑気なことをしているんだらうと笑って行ったような気がします。

昭和二十年八月十五日全社員工場内に整列して終戦の詔勅が下される時を待った。しかし放送はとぎれとぎれで判断するに至らなかった。

社長の越智主一郎は北京の本社へ……。翌日帰って来た社長は社員を前に涙ながらに終戦を告げた。其の後のことについては本社より指示のあるまで作業を中止して保全に務めるようとのことでした。

敗戦、何も知らない私達にとってそんなことがと思っ

た。中国では勝戦だったからだ。それから毎日仕事もなく酒、甘味品等も配給してくれるので敗戦もまんざらでないような気がすることもあった。

その後十日ぐらいたったろうか蒋介石政府に引渡すべく準備を進めていた矢先共産軍の大攻勢を受けそれまでに情報として数万の共産軍が張店周辺に集結していることは知っていた。張店にはまだ二十人以上の日本軍が厳然と陣取っており、何の不安もなかったからだ。しかしその考えは甘かった。

工場の警備は日本人十数人と中国側の警備員三十数人で担当していた。攻撃を受けたその日は中国側の警備員は一人もいなかった。後で知ったのですが共産側と警備員の間で契約がかわされており退去の日時も決まっており、日時が過ぎると大攻撃を開始する内容だったらしい。日本人は知る由もなかった。

そのときが来た。当路一本は喜んで工場と宿舍が向い合っている。宿舍より工場へ入ろうとした社員が一斉射撃を受けて足に重傷を負った。会社の幹部は一刻の猶予もならない状況を察知して、全員直ちに張店に引揚げる

よう命令を出した。しかし仕事を中止していたせいもあって工場と宿舎に散在しており何も知らない社員も数多くいた。私は工場に居たのでその命令は聞いた。

数日前買ったばかりの給料が十数万円荷物と一緒にまとめて宿舎に置いて来たので惜しかった。実戦経験のある私は取ってこようよと決心した。命も惜しかった。一目散で狙撃のあった道路を駆け抜け宿舎に飛び込み荷物を切りさき金だけを持って工場へと戻った。途中風呂上がりの姿でタオルを首に巻き歩いている人もいた。息せき切って引揚げの急を告げたがふり向きはしなかった。

工場に辿りつき二台のトラックに分乗した。鈴成りに乗った自動車は工場の塀を出た途端、私達の乗ったトラックは故障した。予備役曹長の幹部が指揮して歩いて低い所を通過して逃げるよう指示していた。

宿舎の裏山からは間断なく銃撃が続いている。しかし暗いせいもあって誰も負傷することなく一時間くらいで張店に辿り着いた。日本軍は城壁から一步も外へは出なかった。

会社の幹部は課毎に人員を点検したが二十数人足りな

かった。家族持ちの社員もいた。気の毒に思ったがなさめの言葉もなかった。

張店の事務所でまんじりともせず一夜を明かした。翌日捕った二十数人が何がしかの荷物を持って帰って来た。日本語の分かる朝鮮人二人が丸腰で引率して部隊本部を訪れ引渡しの証明書を貰って帰って行ったと聞き感動した。これが日本軍だったらどうだろうと思うと戦慄を覚えた。

其の後破壊された鉄道を青島から修理して前進して来た日本軍の合間をぬって青島に辿り着きアメリカのリバティ貨物船で佐世保に上陸、広島、東京の焼け野が原を通過して真白な雪の北海道に着いたのは十二月の始めだった。

病弱のむすこを抱えて

兵庫県 田 淵 賢太郎

昭和十二年七月、支那事変に召集され、鳥取歩兵四十